

郷土の詩人

第十一回高森文夫を偲ぶ詩大会

入賞作品集

令和六年一月



第十一回高森文夫を偲ぶ詩大会入賞作品集の発行にあたって

高森文夫を偲ぶ詩大会 会長 那須文美



国民的歌人若山牧水と共に、日向市が輩出した詩人高森文夫は、明治四十三年、現在の日向市東郷町に生まれ、平成十年八十八歳で亡くなりました。

若山牧水記念文学館は、平成十七年四月に開館し、「若山牧水」とともに、同郷の詩人「高森文夫」の常設展示室を設け来館者の見学、学習はもとより、顕彰啓発を兼ねた文学施設となっています。

若山牧水の母校延岡中学校（現在の延岡高校）の後輩である高森は、詩人を目指して上京、下宿で出会った詩人中原中から「詩人」を目指すなら「東京大学仏文学科」との進言を受け、入学。卒業後は帰郷し、延岡市の旧制延岡中学校に勤務後満州に渡り満州映画協会に入社。戦争終結後はシベリア抑留

等の苦難を乗り越え帰国。

その後は、母校東郷小学校をはじめ多くの学校の校歌を作詞する一方、宮崎県教育委員などの要職を歴任、最後は東郷町長として行政の発展に努めました。

行政の場に身を置く傍ら、詩集発刊や同人誌への寄稿を続け詩人としても、その生涯を捧げた功績を讃え「高森文夫を偲ぶ詩大会」が創設されました。今回で十一回目となり市内の多くの学校から応募頂きました。二見順雄先生の選により、一席一篇を含む全十六編が入選しましたので、その作品をまとめて作品集を発行しました。ご鑑賞頂きますならば幸いに存じます。

結びに、奮って作品を投稿された児童の皆さん、並びに、学校において指導いただきました先生、そして、選のご協力を頂きました二見先生に心より厚く御礼申し上げますとともに、今後とも高森文夫が尽くした詩歌の発展にお力添え賜りますようお願い申し上げます。

令和六年一月吉日

もくじ

《二席》

茶道 …………… 日知屋小学校 五年 河野 未来 …… 4

《二席》

私の人生 …………… 財光寺小学校 六年 布井 沙和 …… 6
兄の九州大会 …………… 大王谷学園 五年 黒木 美緒 …… 8

《三席》

バスケット …………… 富高小学校 五年 小川 紗奈 …… 10
コンテスト …………… 大王谷学園 五年 村岡 彩歌 …… 12
ぼくの大事な家族 …………… 財光寺南小学校 四年 河野 惺南 …… 14

《佳作》

ぼくのゆめの中 …………… 富高小学校 五年 井上 遼太郎 …… 16
農業体験 …………… 日知屋小学校 五年 村木 晴香 …… 18
ずっとまったよくりごはん …………… 日知屋小学校 四年 村田 佑斗 …… 20
命をつないで …………… 財光寺小学校 六年 永溝 奏 …… 22
日常の音と声 …………… 大王谷学園 六年 副島 爽 …… 24
おさがり …………… 日知屋東小学校 四年 河野 雪那 …… 26
ありがとう …………… 日知屋東小学校 四年 疋田 結野 …… 28
未来の自分へメッセージ …………… 財光寺南小学校 五年 柴田 陽奏 …… 30
世界には何があるのかな …………… 坪谷小学校 六年 柏田 佳波 …… 32
稲かりで …………… 寺迫小学校 五年 河野 希空 …… 34

茶道

日知屋小学校 五年 河野 未来

せいぎして
ビリビリビリリ
しびれたよ
いたかつたけれど
がまんがまん
おちやわんに
まつ茶の粉を
パラパラパラ



熱いお湯を
チヨロチヨロチヨロ
湯気が
フワフワフワ
シヤカシヤカシヤカ
精一杯かきまぜて
クンクンクン
いいにおい
いただきますと手をあわせて
ゴクン
にがみがあるけどほんのりあまい
これこそが茶道の楽しさだ



《二席》

私の人生

財光寺小学校 六年 布井沙和

この世界に生まれて今まで

十二年

一才 生まれて初めて 誕生日

三才 友達できたよ 幼稚園

六才 とうとう始まる 学校生活

これから何があるのかな

八才 コロナで減った イベント

十一才 復活し始めた 運動会

十二才 今年で終わる 小学生活

これまでいろいろ あったよなあ

この先の道は見えないけれど

何があっても私の人生

これからのことは自分で選ぶ

心の声を大切にして

自分の人生 歩んでいこう



《二席》

兄の九州大会

大王谷学園 五年 黒木美緒

兄の中体連

ずっとおうえんした

ドキドキがとまらなかった

決勝のリレー

結果は一位

家族みんなでよろこんだ

九州大会当日

見るだけでもきんちようする

でもおうえんがんばるぞ

泳ぎおわった兄はとてもすごかったし
かっこよかった



《三席》

バスケット

富高小学校 五年 小川 紗奈

バスケットを始めて三年目

バスケットのおもしろさが

分かってきた

シュートを決めた時のうれしさ

パスがつながった時のうれしさ

相手のボールをカットした時のうれしさ

コーチにほめられた時のうれしさ

でも、試合に勝った時が一番

うれしい

わたしはこれからも仲間と一緒に

バスケットを続けていく

バスケットの仲間が大好きだ

ベンチからの応援が力になる

わたしもみんなが元気になる

応援をしてもりあげたい



《三席》

コンテスト

大王谷学園 五年 村岡彩歌

夏休みの最終日

ダンスのコンテストがあつた

毎日かつこよくおどれるように

努力した

何回も 何回も練習した

足はきん肉つうだったけど

かつこよくおどれるようになった

コンテストの当日

ダンスの最終チェックをした

これでいいと思った

コンテストの場所についた

場あたりをして本番をまつた

順番がくるまで他のチームを見た

みんなすごく上手だった

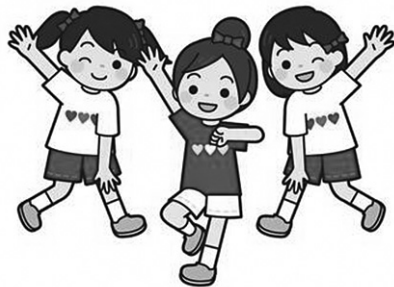
順番がきてすごいきんちようした

かつこよくおどれた

でも結果一位ではなかつた

すごくくやしかつた

次はもつと練習し一位をとりたい



《三席》

ぼくの大事な家族

財光寺南小学校 四年 河野 惺南

ぼくの家族お母さん

しゅうじが上手なしゅうじマン

きれいに書くこといつしんできれいにかくまで

がんばるお母さん

ぼくの大事な家族さ

ぼくの家族お父さん

おどろくぐらいの力もちで

大きいタイヤをかた手でもちあげる

スーパーマン

家族を笑顔にさせて

よろこばせるお父さん

ぼくの大事な家族さ

そしてぼく

いつもがんばりやさんで一生けん命

家族みんな愛してる

子ども一人でもだいじょうぶ

ぼくには家族がついてる

ぼくの大事な大事な家族が



《佳作》

ぼくのゆめの中

富高小学校 五年 井上 遼太郎

きょうも一日がんばった

きょうはどんなゆめを見るのかな

こわいゆめ

楽しいゆめ

なんだかワクワクドキドキ

楽しいゆめを見たいから

心の中で神様にお願いするんだ

「いいゆめ見させてください」

おやすみなさい

そしていつのまにかゆめの中

なくなつたおじいちゃんとおええ

なんていいゆめだ

神様ありがとう

そしてまた一日がんばるぞ



《佳作》

農業体験

日知屋小学校 五年 村木晴香

農業は大変

土にしみこむまでの水やり

農業は大変

草取りをこまめに行う

農業は大変

虫や鳥にねらわれない対さく

農業は楽しい

色んな野菜を植えられる

農業は楽しい

自分で育てた野菜を食べられる

農業は楽しい

お友達とも一緒に作業できる

農業に感しや

大変さを知ることができたから

農業に感しや

あせをかきながら作業するから

農業に感しや

天気によつて作業が変わるから

いつも感しやして食べよう



《佳作》

ずっとまつたよくりごはん

日知屋小学校 四年 村田 佑斗

お母さんがくりを買ってきた
くりごはんをつくるから
まずかわをむく
とつてもかたいくりのかわ
くりのかわむく道具でもむずい
と中で豆ができちゃった
それでもやるよごはんのために
やつとむけてもうたかなきやな

あーおなかすいた
でもまつよ

ホカホカのくりごはんのために
早く食べたい早く食べたい
その言葉が頭を回る

その時なつた
ごはんがたけた時の音
つくえにおかれたくりごはん
ずっとまつてたくりごはん
とつてもおいしそうなくりごはん
やつと食べれる

家族そろっていただきます!!



《佳作》

命をつないで

財光寺小学校 六年 永溝 奏

生きていくために

草をバッタが食べる

バッタをカエルやトカゲが食べる

カエルやトカゲをモズが食べる

モズをワシが食べる

どんどんつなぐ

命のリレー

私は、母と父からうまれた

母と父は、おじいちゃん、おばあちゃんからうまれた

おじいちゃん、おばあちゃんは、

ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃんからうまれた

つづいている

命のリレー



《佳作》

日常の音と声

大王谷学園 六年 副島 爽

トントントン食べ物を切る音

ドンドンドン強く歩く音

コンコンコンたまごをわる音

ジュージュージュージュー料理をする音

ブクブクブクお湯がわく音

カチカチカチゲームの音

日常はたくさんの音であふれてる

あのね友だちが話す声

だめだよあの子が注意する声

いつてきます父が仕事に行く声

ただいま母が帰って来た声

早くいくよ友だちがよぶ声

まって私の声

日常はたくさんの声であふれてる

日常っていいな



《佳作》

おさがり

日知屋東小学校 四年 河野雪那

洋服をじゅんぴりする時に思った
妹の服の方が多くていいなあと
妹のダンスは服でいっぱい
ズボン半そで下着くつ下

わたしはふしぎに思った
でも母はおさがりだと言う
着た記おくのない服もあるけれど

好きだったあの服は妹が着ている
もう一度着たい でも着られない
わたしはぐんと成長したのだから
成長するのはいいことだけど

服を新しく買う その分服を妹に
妹が着られなくなったら親せきへ
服はみんなにわたっている
さみしいけれどももうとうれしい
おさがりってすてきだな



《佳作》

ありがとう

日知屋東小学校 四年 疋田結野

生んでくれてありがとう
愛してくれてありがとう
ありがとうの輪 広がる

友達になつてくれてありがとう
そばにいてくれてありがとう
ありがとうの輪 広がる

勉強を教えてくれてありがとう
え顔をたくさんありがとう
ありがとうの輪 広がる

この世の中に
ありがとうの輪 広がって
みんなの心
ゆたかになるといいな



《佳作》

未来の自分へメッセージ

財光寺南小学校 五年 柴田陽奏

明日のわたしは
どれだけじょうたつしただろう
今日にくらべて
うまくなつたかな

一年後のわたしは
まだダンスつづけてるかな
つづけていてね
ぜったいに

五年後のわたしは
もう、十六さい
みんなのお手本になるような
中きゆうになれたかな

二十年後のわたしは
大人になつて
プロダンサーになつているかな
これからもずっとダンス
つづけてね



《佳作》

世界には何があるのかな

坪谷小学校 六年 柏田佳波

世界には何があるのかな

世界にはこんな米料理がある

日本のすし

韓国のビビンバ

中国のチャーハン

イタリアのリゾット

スペインのパエリア

いつか食べてみたいな

世界には何があるのかな

世界にはこんな麺料理がある

日本のうどん

ベトナムのフォー

タイのパッタイ

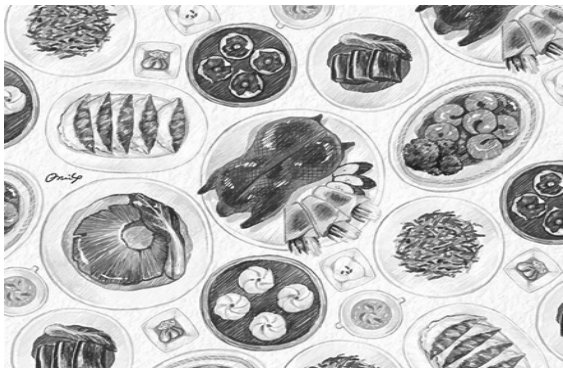
シンガポールのラクサ

カンボジアのクイテイウ

いつか食べてみたいな

世界の米料理、麺料理

大人になったらいつか食べたいな



《佳作》

稲かりで

寺迫小学校 五年 河野 希空

カマを使つて
ザクザクと
こしをかがめて
次々かるぞ
「あつ」
とちゆうでね
茶色のネズミが出て来たよ
手にのせたら

ぐるぐる走つて
かわいいな
「あつ」
次はカエルさん
つかまえようとしても
ピョンピョンとびはねる
追いかける私とにげるカエル
走つても追いつかない
スピードすごいなカエルさん
稲かりのつかれも
何だかわすれたよ



総評

選者 二見 順雄

今年は、市内の全ての学校から作品が集まりました。六四九編です。

先生方やみなさんの底力をうれしく思います。今回も集まった作品を多い順から分類すると

- ① 自然を読んだ詩
- ② 友達、自分、家族のこと
- ③ 学校（勉強外）
- ④ 動物、植物のこと
- ⑤ 命、人生のこと
- ⑥ スポーツ、習い事のこと
- ⑦ その他

これらの作品をていねいに読みました。毎年のことですが、この自然を書いた作品が多かった。次に友達、身の周り続きます。

作文は初め、中、終わりなどの段落構成が求められます。詩は作文と違って、感覚で処理できます。しかし、どれも書きっぱなしではいけません。推敲（すいこう）く作品をよくしようとは何度も考え、作り直して、さらにより作品にすることを推敲すれば、

良い作品になるものがたくさんありました。

昔（江戸中期）、松尾芭蕉という有名な俳人の俳諧紀行（俳句を読みながら旅をする文）に「奥の細道」というのがあります。

閑さや岩にしみ入る蟬の声

この句は高学年なら知っているでしょう。

この俳句ができるまでには、いくつもの未完成の句がありました。

山寺や石にしみつく蟬の声

淋しさの岩にしみ込むせみの声

さびしさや岩にしみ込む蟬の声

芭蕉さんは、何回も推敲したのでしょう。結果は

閑さや岩にしみ入る蟬の声

やはり、推敲の甲斐があった。やはりこれはいい。素人でも分かります。

私は教員時代の夏休みに、奥の細道をたずねました。もちろんこの立石寺にも。地元では「山寺」と

言っていました。この寺が、出来たのは八六〇年。山全体が修行と信仰の場のようなです。登山の入口に卵型の中型の石に「閑かさや」の句碑があります。入口から往復の約一時間三〇分。石段の数は約一〇〇〇段ちよつと。半分上りかけたところのセミ塚に芭蕉の句がありました。

さて、俳句のこともう少し。

柿食えば鐘がなるなり法隆寺（正岡子規）

名月を取ってくれろと泣く子かな（小林一茶）

これも有名な句ですが、どの句にも「動詞」が入っていますね。この五七五の言葉の中に動詞を一つ入れただけで、動き（映像）がでてきます。

これは、詩でもそうです。説明調の詩がたくさんありました。これは訴える力に欠けます。

なお、書いた自分の詩を朗読するのもよいですね。自分の作品を自分の耳で聞くのです。何とも素晴らしいではありませんか。何度も読むうちに詩のリズムとか、表現法などの勉強にもなりますよ。

高森文夫先生の詩碑「冬薔薇」の除幕の時の朗

読は、日高みのり先生（現若山牧水記念文学館勤務）でした。

冬薔薇

花園の土 荒き季節

短か日の 暮れやすきころ

剪定を忘れし 枝に

冬薔薇 侘びしく咲きぬ

花園に 花もなき季節

戸外には 人気なきころ

冬薔薇 孤りし咲きぬ

あはれなる 冬薔薇かな

みのり先生の声が、今でも私の耳から離れません。音域など詳しいことは分かりませんが、メゾソプラノの響きある美しい声でした。

みんなも自分の詩を声を出して読むと詩がもつと好きになりますよ。

■入賞作品の寸評

一席 茶道

茶道の立ち振る舞いは、生活の基本となる動作。しびれが切れてもだんだん美しい立ち方になります。

二席 私の人生

十二年間でこれほどのことを体験。今後の体験は想像もつかない程多いよ。

二席 兄の九州大会

なんとなんと九州大会での優勝。家族や応援団の全身での大喜びが目に見えます。

三席 バスケット

狭いコートの中でパス、ドリブル、シュートなどとその運動量の多さ。汗もダクダク。

三席 コンテスト

それぞれのチームがコンテストに向けて猛練習の結果がこうなった。来年がんばれ！

三席 ぼくの大事な家族

がんばり屋のお父さん、お母さんのことを誇らしく言葉にしました。そして、家族愛も。

佳作 ぼくのゆめの中

この作品の入選の決め手は「なくなったおじいちゃんに会えた」なのですよ。

佳作 農業体験

農業は「大変楽しい、感謝」でまとめています。土を耕し汗を流し作物を育てる大切さ。

佳作 ずっとまったよくりごはん

秋の味覚の代表くりごはん。この詩を読むと読者まで食欲が出てきます。

佳作 命をつないで

前の連が食物連鎖(れんさ)。第二連が命のリレー。人の祖先の数は平安時代までさかのぼると約十億七千万人とか。

佳作 日常の音と声

空気の振動(しんどう)が耳に入り鼓膜(こまく)をふるわせることによる感じ。じつにたくさんのお音を詩にしました。

佳作 ありがとう

「ありがとうの音楽」はたくさんあります。「ありがとう、さよなら」では、先生、友だち、教室に感謝。

佳作 おさがり

体が大きくなり、着れなくなった衣服を妹や弟にゆずる。この「おさがり」のひびきには、愛がこもっていますね。

佳作 未来の自分へメッセージ

五年後、二十年後の自分を考えています。めざせプロダンサーを。

佳作 稲かりで

田んぼにネズミやかえる。ほかにもトカゲ、タニシ、ミミズ、ドジョウなども。これらにとって、田んぼはとても大切な所。

佳作 世界には何があるのかな

世界の米料理、麺料理がこんなにも。よく知っているなあ。小麦粉料理ももっと多いのでは？

現代版 〈今昔物語〉

二見 順雄

今は昔。昔々のお話です。五十五年前、昭和三十年のことです。



先りよ
寿式提
木卒業
小年デ
呂8刊
土昭和
夕々

私は、教員になって半年したら妙なことに児童詩にはまりました。その原因は、木村寿さんの講演を聞いたからだと思えます。

今は亡き戸高汀校長先生が秋のある日、職員朝会で、「先生方、学校の講演会にすごい人を講師に呼びますよ。先生は、戦前の我が国の綴り方教育の第一人者です。一流の人の話から、何かを学んで欲しい、それを自分流に形作って欲しい。」

教員一年目の私は、綴り方なんて関係ないし、全国一流だろうがなんだろうが、今の私には、興味もない。今は、学級作りでふうふうだ、とそんな心境でした。そんな私でしたので、校長先生の言われるのが他人事のように聞こえたものです。「私は、はがき大のわら半紙をいつも教卓におい

ていました。子どもは朝、登校すると、すぐにその紙に詩や綴り方を書いていたものです。」

木村先生のこのひと言が、私をして詩や作文指導にはまり込ませたと思えます。

早速、次の日私は

「明日から、毎朝、登校したら詩を書いてください。紙は、教卓の上にあります。」

「先生、詩なんて、やだ、朝、来たら外で遊んでえ、私は読書がしたい、詩なんて、やだやだ。」

子ども達と相談などしなかつたので、子どもは抵抗を試みました。私は私で、子どもには子供の都合があるなんて全然考えません。新卒一年目の青年教師。二十二歳でした。子どもの意見を聞くような広い心は、全然ない当時の私でした。足を地面に突っ張って、主人にいやいや抵抗する犬を強引に引っ張るようなものでした。

やると言ったら、やるんです、これが私の教育です、私についてきなさい、と当時バレーではやった言葉を平気で言う私でした。先生がはまると、子どもはついてくるという妙な自信をもつ青年教師の私でした。

とれるもんだ

この詩を大いにほめたたえたものです。そればかりでなく、どの子の作品もガリ版で印刷して、保護者にも知らせたものです。これが効いた、きいた。

親が喜ぶと、子どもはどんどん書く。これだ、と私が認識したのは「詩や作文は、ほめることだ」ということでした。大げさにほめた。どんな作品でもガリ版刷りで親に紹介し続け、ほめまくったものです。

もちろん、指導も私なりに根気強く行いました。最初の頃は、うれしい、かなしい、さびしい、おもしろかった、つらかった、くやしかった等の抽象的、観念的なものが多く、それでも五重マルをやったものです。

「うれしい、うれしいを百回書いてもね、なかなかかねえ、それよりも、ぼんざいしたとか、やったあと叫んだとか、スキップして家に帰ったとか、うれしさからくる言葉なり動作なりで書いたほうがいいと思うよ。これを具体的な書き方と言います。」などと指導しました。

秋も進む頃、子ども達は毎朝、詩を書きます。いや、書かされるといのが、実態でした。しかし、意外や意外、子ども達は、青年教師の私を喜ばせる詩を書き始めるのです。まだ、あの頃の私は晩酌なんて知りません。

下宿で夕食を済ませると、すぐ子どもの詩を読むのが楽しみの一つになっていっています。こんな詩ができました。

妹 五年 古本裕二

遊んでばかりいる妹

目をコスモスの種のように

細くして

とびはねている

「勉強しないといかん」

というと

「いいから、いいから」

こんどは、

大黒さんみたいにわらう

遊んでばかりいて

あんないい点が



古本君の詩を読みながら、学級の子どもに話す。

「ああ、いいねえ、じつにいい。・・・コスモス・の・・・たねとか・大黒さんとか、こんな書き方を比喩ひゆというんだよ。比喩を使うことで、ものごとを生き生きと表すことができるのです。古本くん、すつごいなあ。みなさん、彼を見てください。さ、古本くん、立ってちょうだい。みんな古本くんに、拍手。」

もう古本君は、天にも昇るくらい喜びだったでしょう。喜んで立ち上がりました。

「古本くん、きょう、帰ったらね、このことをお家の人に話してね。」

比喩の話が効いたのか、比喩を使った詩が続々と生まれる。ある子の作品を激賞すると、ほかの子もどんどん取り入れる。しかもなんの抵抗もなく、である。

この手法は、どの教育活動でも通じることができるところに気がつき、むしろ、私が子どもに学んだものでありました。

「子供同士がお互いに学び合う、子供同士が最近接上位領域に向かって、共同学習するという、じつに

大きな財産」を私にくれたのでした。

このことは、私のそれからの先、四十年近くの教育活動の根幹をなすものであったと言っても過言ではありません。

いねの花 五年 甲斐 恵子

虫めがねで

いねの花を見た

花が開いていた

白いちらちらしたものが

いつぱいさいていた

二つの小舟が

あわさったような

かつこうだった

その時、風がふいてきて

二つの小舟は

はなれてしまった



とうちゃん 五年 佐藤 君代

なぜ、あの時息をひきとったの
なぜ、もつと生きていかなかったの

別れる前にどうしても

話が出なかったのに

若い命をなくしてしまつたね

仏さんのチューリップが

とうちゃんに通じる電話

みたいだったので

そつと耳をつけて

「もしもし、とうちゃん、何か言つて」

と言つたら

「サワサワ」

とうちゃんの声が出たよ

とうちゃんの死んだこと

夢だつたらよかったのに



そういう指導の中で、ときどき、

「みなさん、詩というものはね、例えて話すよね、
こういうものなんです。ここに、粘土があります。

これを手のひらでギュウギュウ押し付け丸めます。
しかしね、それでも指の間からこぼれ出る粘土があります。これを詩と言いましよう。中に残っている粘土を作文とでも言いましよう。

詩というものはね、押さえつけても押さえつけても、飛び出てくる大事な言葉なんです。あなた方の心にあるもので、どうしても言わなければならぬ、そういう大事なものを、これをね、言葉にすれば、それでいいんです。」

子ども達は分かつたような分からないような顔をしていました。それでも書いた書いた。いや、書かせた、書かせた。子どもも私もはまり込みました。

そのおかげで、あの頃はやっていた朝日新聞社掲載の子どもの詩の欄「小さな目」に百五十編も掲載されました。一人の指導でのこの掲載数は、あの頃の新記録だつたということです。

あの木村先生のお話を聞いていなかったら、私の児童詩の取り組みは、おそらくなかつたことでしょう。私は木村先生の詩集や綴り方などをよく読みました。「赤い鳥」時代のことです。延岡市の土々呂小時代の木村寿さんの「光の子」という作品集もあ

ります。確か百田宗治だったと思いますが、百田さんが木村先生の作品「光の子」を絶賛。
「ああ、こんな先人が隣の町におられたんだ。」
青年教師の胸に熱いものが、流れた事を思い出します。

私の詩の指導は「花鳥風月」ばかりではありません。私のそれは、ほとんど生活詩でした。生活綴り方の大家であった木村寿先生のあのお話を聞いた影響がすごかったからでしょう。

もともと「生活綴り方」は、絶えず弾圧を受けてきた歴史がありました。「貧乏なことを教えてはいけない」「社会の仕組みを教えるはいけない」

時代が進み昭和三十年代になり、そういう弾圧はもろろんなくなりましたが、私の指導法に、批判的な人はいたことでしょう。初任校の細島小学校時代には、漁師の働く姿を書かせたし、東郷小学校時代の作品には、出稼ぎの詩がじつに多いことから分かります。

大正時代、昭和時代の綴り方の歴史の詳しいことは分からないまま、とにかく「子どもの生活に密着した指導」を求めていたことは、作品を見てもよく

分かります。子ども達は、メモを取ることに慣れ、日記を書き出したり、価値のある考えや物事を書き残す「心の目」が育つていったような気がします。その後、国語研究サークルで新しい言語理論に触れる中で、私の言語観も変容し、いよいよ作文指導にのめり込んでいきます。

ここに掲載した作品の子ども達が今や還暦。つい先日「還暦同窓会」に呼ばれました。今や人生たそがれの私がこれらの詩を紹介しました。その時は「あの頃の青年教師と童顔の子どもの姿」に戻っていました。

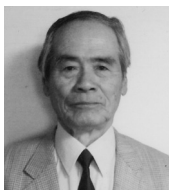
昔話は、これでおーしまい。

退職校長会日向支部編

文集「絆」より

選者紹介

■一見順雄（ふたみよりお）氏



昭和十四年（一九三九年）十一月四日、都城市志和池に生まれる。昭和三十八年三月、宮崎大学学芸学部を卒業。日向市立細島小学校を初任校に、以後三十七年間、県内各地で教鞭を取る。日向市立財光寺小学校校長を最後に退職。

在職中は作文、児童詩、俳句指導に熱中。指導した児童の作品は総理大臣賞、文部大臣賞、環境長官賞などを受賞し、これら全国規模の受賞作品は四十八点。自身は、国語教育向上の功勞として、宮崎県教育委員会から教育特別功勞賞、全国的には博報賞、文部大臣奨励賞などを受賞。昨年度みやざき文学賞「随筆部門」で二席を受賞する。

退職後は、日向市社会教育指導員、家庭児童相談員、区長公民館長などを歴任。現在は、日向若山牧水顕彰会副会長。

小学生が「農業を体験する学校」の校長。この学校は、設立後十五年が経過。卒業生は五〇六名になる。県内に同様の姉妹校が三校も誕生し、交流を深めている。農業体験を通して「食・命」の関わりの大切さを教え、シニア世代と子ども達との交流が評価され、平成二十四年二月四日「地域づくり総務大臣表彰」を受ける。

第11回 高森文夫を偲ぶ詩大会

【応募数】

学校数	学年別	応募数
13校	4年生	232
	5年生	199
	6年生	218
	計	649

高森文夫の略年表

年代	年齢
明治四三	〇歳
大正五	六歳
大正十一	十二歳
昭和二	十七歳
昭和三	十八歳
昭和四	十九歳
昭和六	二十一歳
昭和七	二十二歳
昭和八	二十三歳
昭和九	二十四歳

一月二十日、高森一郎（二代為市）、セツの長男として、現日向市東郷町大字山陰内一五〇番地に生れる。

四月、東郷村山陰尋常高等小学校（翌年東郷尋常高等小学校に改組）入学。

四月、県立延岡中学校（旧制）入学、下宿生活を始める。

三月、延岡中学校を卒業（第二十四期生）。卒業後、受験勉強のため上京。日夏耿之介主宰の黄眠詩塾に入門する。

十一月、日夏耿之介、堀口大学、西条八十合同編輯の雑誌「パンテオン」に詩「郷愁」を発表（初の作品活字化）。

四月、私立成城高等学校入学、十月、日夏耿之介監修誌「游牧記」に詩「薄暮心」を発表。

一月、吉田秀和と同居を始める。十二月、吉田秀和のフランス語家庭教師であった中原中也を知る。中也から愛用の聖書を与えられる。

四月、東京大学仏文学科進学。八月六日、中也が帰省中の高森宅を訪問。

春、本郷にて、高橋新吉、石川道雄、中原中也、木本秀生と同人詩「半仙戯」創刊打合せ。

五月、石川道雄編輯「半仙戯」創刊、同人として参加し、毎号作品を発表。

六〇七月、帰省中の高森宅を中原中也が訪問。九月、中也とともに「山羊の歌」の題字と装幀を依頼するため高村光太郎を訪問。十二月八日、中也の「山羊の歌」できあがる。

昭和十	二十五歳	一月中旬、上京の途中、山口に立ち寄り中原中也宅に三泊する。三月、東京大学卒業。
昭和十一	二十六歳	七月、中也来訪（十日頃）、三〇四日滞在する。
昭和十二	二十七歳	夏、父に離れを新築してもらい、その二階を居とする。
昭和十三	二十八歳	十月、県立延岡中学校の教授嘱託（英語）となる。
昭和十四	二十九歳	六月二十五日、第一詩集「浚渫船」出版。七月、中也が「四季」第二十九号に「詩集 浚渫船」と題して紹介文を発表。十月二十二日、中也、鎌倉にて没（三十歳）。
昭和十六	三十一歳	十一月、日夏耿之介の推薦で「中央公論」十一月号に詩「一つの季節」掲載。
昭和十九	三十四歳	三月、延岡中学校を辞職し帰郷。九月六日、宮崎市の中村秀と結婚。当日中也からの書簡を携え、夫人同伴で満州に渡る。十日、新京の満州映画協会に入社。この年、中原中也賞が創設（第一回受賞者は立原道造）、次点となる。
昭和二十	三十五歳	三月、丸山薫編「四季詩集」刊行、作品六篇が集録される。七月、第二回中原中也賞を杉山平一とともに受賞。
昭和二十四	三十九歳	三月二十一日、新京にて現地応召、北満虎林の満州第九三〇部隊に入隊。形見がわりに詩集「泡沫集」を編み少数の友人に配る。
昭和二十五	四十歳	八月、終戦とともにシベリアに送られ、ハバロフスク等の收容所で労役に従事。
昭和二十六	四十一歳	十二月、ナホトカから舞鶴を経て帰還。
昭和二十七	四十二歳	九月、母校東郷小学校の校歌作詞を担当。以後県内各地の小中高校の校歌作詞を依頼される。十月、三好達治編「日本現代詩大系 第九卷」に未発表作「嫌悪の歌」「石の歌」を含む詩八篇が収録。

十一月一日付で東郷村教育委員長就任。

昭和三十	四十五歳	五月、エッセイ「忘れえぬ人／過ぎし夏の日の事ども 中原中也」(十七日付「朝日新聞」小倉版)掲載。
昭和三十四	四十九歳	十月一日付で延岡市教育委員会教育課長に就任。
昭和三十六	五十一歳	三月、満州時代の知人森繁久弥が公演のため来延、旧交を温める。
昭和三十七	五十二歳	三月十五日、楽譜「惜春」(作曲伊藤宣三)が高森通夫より刊行。
昭和三十九	五十四歳	十月一日付で延岡市教育長に就任。
昭和四十一	五十六歳	三月、弟通夫の主筆誌「一樹」二号に詩「冬」発表。
昭和四十三	五十八歳	二月、第二詩集「昨日の空」出版(装幀高森淳夫)。八月二十四日、この日開催された四季同人会において同人に推挙される。十月一日付で東郷村教育長に就任。
昭和四十六	六十一歳	六月、詩「善光寺」「姥捨」(「四季」第九号)発表。
昭和四十九	六十四歳	この年「牧水カルタ」完成。塩月儀市、大悟法利雄、若山旅人らとともに選歌に携わる。
昭和五十五	七十歳	二月、エッセイ「ある歳末の記憶(中原中也のこと)」を発表。
昭和六十	七十五歳	八月十一日付で東郷町長に就任。九月、エッセイ「満州の空の下で」執筆。
平成元	七十九歳	八月、東郷町長退任。
平成二	八十歳	六月、「赤道」別冊 本多利通追悼号に追悼文「痛恨、本多君」を寄稿。十月十日、第三詩集「舷灯」出版。
平成三	八十一歳	三月、宮崎日日新聞社より詩集「舷灯」に対して第一回宮日出版文化賞が贈られる。
平成七	八十五歳	七月三日、中原中也記念館館長福田百合子が来訪。この日、中也より献呈された「山羊の歌」を記念館に寄贈。また中也詩碑建立の構想を語る。
平成十	八十八歳	六月二日、心筋梗塞のため自宅にて没。法名「叡光院獄桜徳蓮大居士」。県内各紙誌に追悼文が掲載される。

郷土の詩人
第11回高森文夫を偲ぶ詩大会入賞作品集

令和6年1月発行

主催 日向若山牧水顕彰会
若山牧水記念文学館
後援 高森文夫顕彰会

(事務局)

〒883-0211 宮崎県日向市東郷町坪谷1271番地
若山牧水記念文学館内
電話 0982-68-9511
FAX 0982-68-9512